へ13
4439
5

東谷文庫之印

A13
4439
5

加之久全傳香篭草巻之五

梅暮里谷峨著

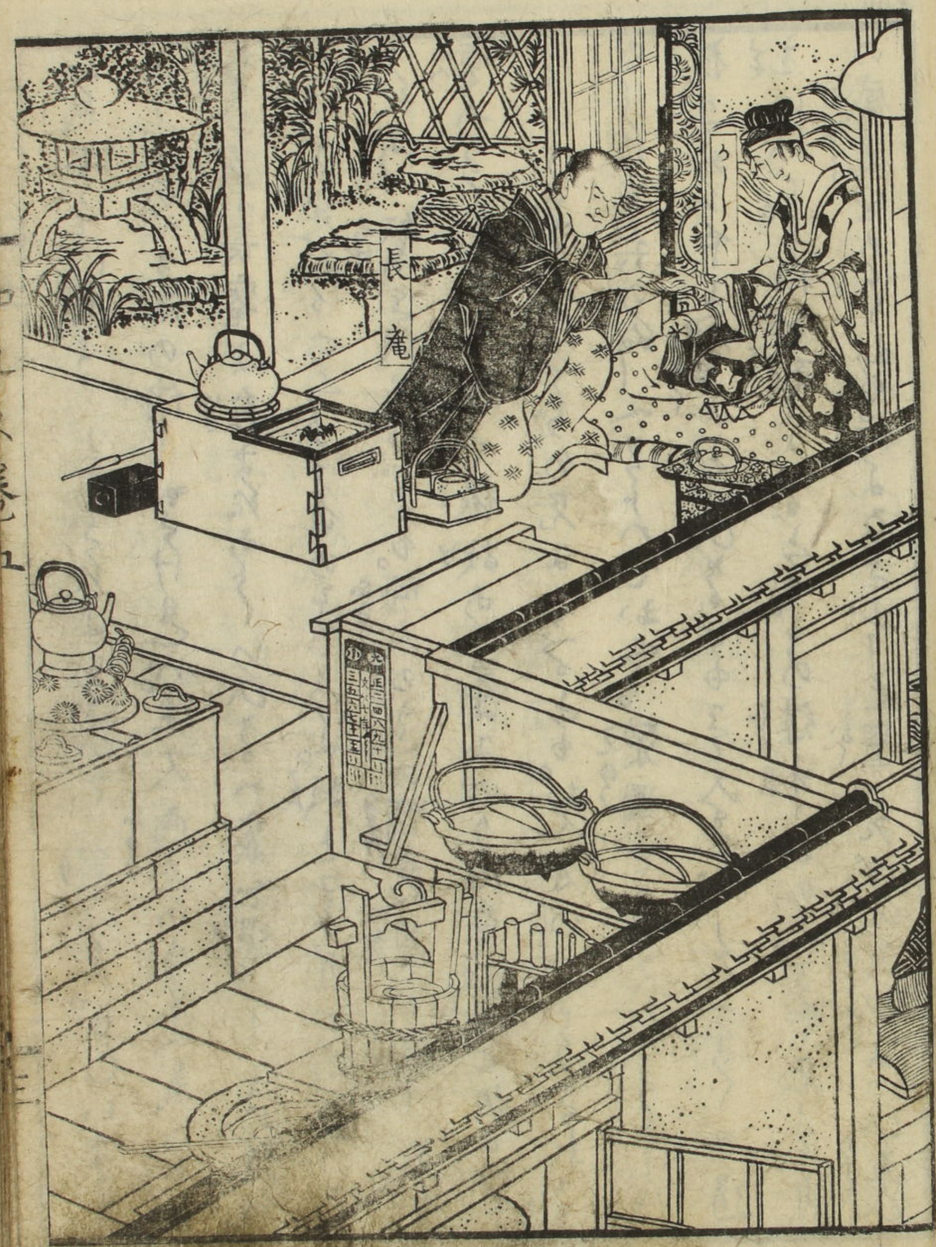
第十四　江東

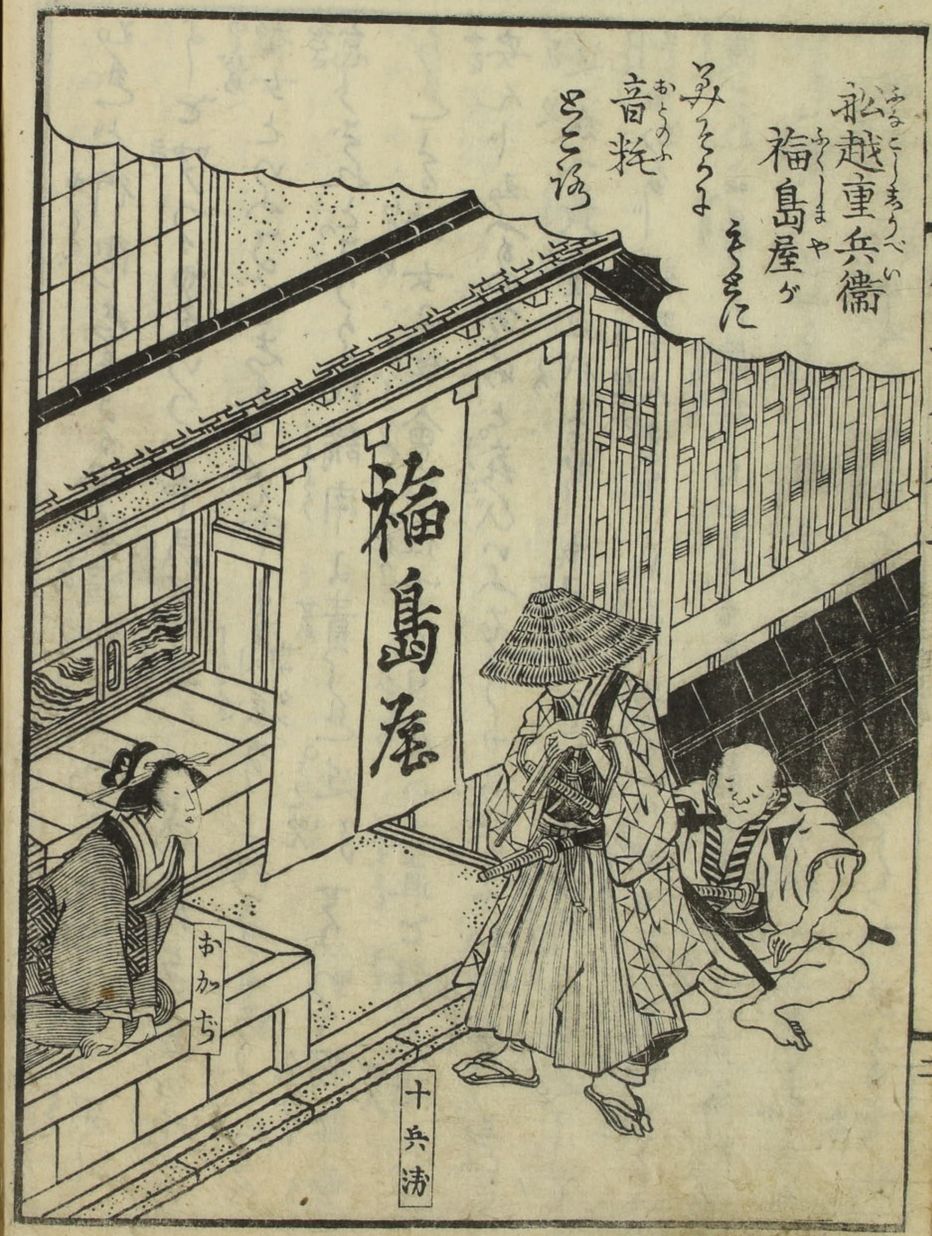
清兵衛へ異見の段

加説茨木長庵ゟ。心よ僥計を含ム。福嶋屋清兵衛ゟ方へ来ル。青ゟく上坐よ〱直ル。跡より續き入り来るものハ。深き篇笠より面を匿し一個の武士。門よ佇止。内のようゝ様子打探ひ案内を乞ひ。阿梶ゟ応ひ。何處のものゝ問ハ。在下ハ這家のあるじ。清兵衛ゟ談ぜんとて来ル。いとも一朝一夕よりひ述べ難き縁故。世を忍ぶ身の人ゆ逢ハ延引。奥深き所ゟ出ル。小野月ゟ。けふ亀ゟく伴ハ。べしとの詞よ。阿梶ゟ。ゟと云ハ推量ゟど。人目ゟ。問ゟ為

もとく先ゝら深房へ伴ひ初ぬ。長庵まゝ母しの足えざまを。此方彼方を打見廻し。ゑよ珠玉を彼れの紙門ゟ開れ。ど腹着よ卧るを。えゝ驚れ。儀へより脈るどそうて。容体を懇よをける所よ。阿梶れ如るゝざれが奥の賓寝ハ夫トて。もべゝ〳〵預け。まゝり出く長庵よゝち向ひ。おんを対へんるまゝざる医師。いづ地ゝり来りまひしゃ。人の家よ入るよ礼あるものを。按内もるゝ人ゑを得ゝれ。始末と責ぬまゝ。長庵へあざを笑。来べれ筋ゑまゝべとを来りゝり。然れ如るゝれ。在下へゝ母しが同血の兄。茨木長庵とゝるもの。這所へ来りしゝ妹女ゝ母しが牙のゝくるゝり。嚮よ印南六三とゝるものよ。唆ゝさまゝ亡命をつる如。弟鬼原源を逐ゞ告ゝり。大騒所へゝれるゝ捜ゝ求

もゝまゝど行衛ゝまゝざる所よ。這神崎よ。そゞれめとゝるり果ゝ。
よゝを笑つるゝまゝ。いづそゝ暮ね遂ひしゝあゝれ。ゑの家、の抱へのゝ
抱女とゝるゝを。ゝまゝり。ゝれ。ゝも摘深ゝゝれるもあゝて。ゝれゝ
怠ゝざれと。ゝゝゝれ諸南よ責ゝまゝ。延ゝ出ゝり。ゝ拐翠賣
ゝまゝる妹女よ環會ゝ在ゝが。日本の正直を神も憐ゝ。ゝを
安んゞまゝるものゝあと。ゝゝびいゝゝざりもるれゝるゞゝ。推量りまゝ。
這家へ黄金よ代るゝ世ゝも。ゝ視の六三郎が所為るゝゞ。
判もゝるゝゞ拐翠人。ゝゝゝく見の出るゝゝ。妹女ゝを仔細ゝ
渡ゝれよ。者ゝゝ推碎ゝよゝるものゝゝゞ。誰ゝゝ抱女ゝゝるゝ
ゞゞ。賣人を出ゝゞく。縦令六三郎。ゝもせめ。何人ゝもせよ。ゝの人
の襟元を引ゝく。黄金を償せん。ふゝのゝち何まゝゝ肯引


長庵


松越重兵衛
福島屋が
勇ましさよ
音粧
ものこそ
福島屋
おかち
十兵衛

紙安うしめらやとぞ。ぐれよるぐひを創くべ。ぐしいまうよ兄うの名の傳ゝ。ぐけまが。主人両人の手手気の毒よ
想ひて。長庵よ息まれあゝいひるハ家を退ゝその後へ。
征人と定むるゝうさ風のうの。我とつぶ身を川升ろ。
うれふ繁を紙ゝうざるも。両人のうの情更。恩を謝し礼を
厚ゝるべきを。却て縁故あるまのゆゝ。恩を仇よ望
るのうゝて。血ぢの兄よゝるるも。ゝん身のゆうれる
るぐば。太兵のゆゝへゝをおう。縈圖をるゝんゝゝ
猿をゝぐやと。贊ゝといひるをもて入ゝぐ。きゝろ道
立いひて。れを聚ゝむるも。その謀半よのぐを手兄うる身
の威光をゝゝゝの侵よるさぐゝて置ぐれぐと。ひよいひ角ひ

るを。阿梶ハ物よ馴うる者るゝとべ。静ゆうよ両人を制ゝ。ゆり初
るゝうざるゝが牙のうゝ。ゝゝへぐ山一ッよて回答るゝうゝ。征人
清兵衛よいひをけるべ。直地よ埒の明へれる。ゝゝゝゝとゝも
病ひよ障らへあゝうるん。えゝうひうゝをあぐをぐ。ゝをあん
ゝゝやといゝるゝ。無道の長庵。ゝを手込ようゝん
とるゝを。阿梶が隅よ。ゝゝハ龍僊を避け所完と逃き。紙
門の中へ走り入る。跡よひ紙続きく出ゝへ。ゝるゝ梶をゝ。
紙門の中へ踏入ゝ。何者の所るゝうん。長庵を大地へ撞と
頭搏倒。清兵衛ゝ静ゆうよ立出ゝを何者ゝゝ。ゝぐ搏落
の枕を騒ゝ。案内もるゝ引房へ泥踏踏ゝゝ面憎ゝと。撲地
とゝゝ出ゝゝべ。阿梶ハ意地ゝと走ぐ。長庵ぐいひ逃へる

雖意つがりうよ告さうろう。長庵はやうくよ起あがり。痛さ紙忍口鞠し。拐掣する妹女りしゆえ。連あんとうると在丁を。何奈よ投ぜ。ゆとひをそゆうも奥へ行んとうるを。弟しをとりて戻せ。清兵衛へうをやうる。その手首をそく呵と笑ひ。おん身のどれの俵計よ惑へさま。這活賈のうべそど。仮初ゆも免し紙うけ。狂言の夜の盗よ。酒さうり仮へせ。夫の痛着。良薬をゆん。あよ。身を黄金よ贖ひう。操正紙女の道をゆるよを論よ及ぐを買うけ。うれべ。縦令二百両の元令償ふとも。年季明ざるうちへ。ふの俵るう。詰言吏べき百へ持ざるを。囚よ在を養ひの舎兄兎原源を丞大哥ゆ。商義のうべもあるべうが。おん身の栄図よ紙も時を。多くゆうる紙

妹女の。助けとるうを卒をるを。忌をうふ太兵とゆうろ妻とるうんを紙よ立む人でる。ゆよりしが病ひゆ。おん身を目ゆへ。足えざるうと突たるし。腰中うり紙よ包をう金をうり出し。長庵が目の前へ投ゆり。些き金を不足とるうさど。兄を教ふりしが実紙。うくうり納め。飯るど食しく腹を肥。いづくへも退べと。勇猛の男子の一分よ。面巻るをべざゆる。長庵へ紙義ゆを。金うり納め。ゆ術ゆるをたりたくを仕智んとうるおりへ。嘶愧する光景よ傷り。阿猩よ誘を。奥の方へを行くる。清兵衛へ紙跡うち足ゆり。縦令腹へゆるうても三く血脇の同胞斯を紙の遠へをと恒る打目るうよ立るりを。こゆうり紙へ佞が身ゆのを。逼るゆ女子の習ひるのれども。揉れ

と指の切りうれるも。又母へ尽せる孝の中。世の中よまれある
と。病ひよ障ふあらん。即房へ入て小窠るべと。洞
巻よ真実をあらわし。深房へいりてる。斯て印南六三郎
母義瀬を。脱の森三郎よ伴ひ。爰ぞと福島家ゞ門ト不
案内をえひ。西てるるもとしとぶひよ。顔見あへせけまど。
題生ま〳〵中〳〵。お弔洞を見えて。内よ入まど。悪るれを
問ひ問ふるるもるく。俄うち欲を。義瀬をるのふうう紀紀
詰んまと。森三郎よ持せる布包の中より小窠ゞ紀会
の衣をえり出し。ゞが前へそとあれ。詳よ説も洞糸ゞそ
るまどゞいわべるふ一部始終。おん牙六三を慕ひ出し
あく。婿を源を丞。おん牙の為ゞも胚異るの兄長麿。ふ

うゞよ立るるのあるく。此国ゞ影ねり。一日源を丞ゞ
脈をとる。權く驚ける顔付しく。常腹茅もるのそぶまど。
周章茅を調合ゞ。おゞ〳〵ゞ急変おるん
るの紀却まま。何の思慮ゞもまるぞと。正紀兄の洞を
守る。一口茅呑そると。神脳乱る。竟よ墓ゞ死出
の旅。便るれるをなるぞやと。ゞいるゞの悲さつき。
声も沈そど注るを。義瀬を道理よそ。なるりと。脊
を抱ゞる。森三郎も耳聾る牙のひ言へ更よ通ぜざま
とも。然る沢を推量る。倶よ如り双抱ると。義瀬をるへべ
の洞を拭ひ。源之丞死ゞそのち。一七日も立るよ。佐仲次方
再縁を連ゞよ茅る長麿曾平。ゞるる小窠ゞ石紀

長庵
清兵衛
見顯
おちぢ
おちぢ
長庵

あや慈しの涙も乾かぬよ。固辞気色もなく肯引い妻が育てし子なるぞや。隘阻なるべく。こなくの繰言よあるべい恥しめ。あるひは宵山まど。学びざるこそ道理なれ。再縁なその夜よ。積る恨なれよ。あさめ。もりかさよ左仲次を即座へおびきなせ。只一下突よ差貫くめ。なかなかの自害と。きけるとれのなるべい。いづくうう悲しれぞや深きなるとさてなぬなるべい。羞しあがさびしさよ。常ともおとなく。言なるものも妻なる中よ。世の中の常なれい。若きもあぐしの差繋の家と消へ。老なるなる。高砂の住の江の松。世なる衆えのなる間ひも待ぶ。反古傑の小袖こそ。なるが紀念とあん身よ送り。いいやそあいあいされど。弟六三なるぞなるものなるなるこそ

ぶ使くてこまこまと。いひ出をとびよ悪しるのとなきに消えも滅となる。例くとあんの身のうえの去まれぬなるものの室しく。足も中有ようくおりひよこなるしい。あん身のうえの悪るれも関ひ。両あい。六三なが行方もなる生ぬう。弟三い小園ぶ紀念のなの小袖。垢つれまど小園ともぞひて。摺森の裾あるとさしおれて。心の隙のあるとれい。一扁の四向い小室よられ功徳と消あい身くいひまべりしもなれる。俠よあるべるべれ。あるいぬ倣通も重る縁と。あるべよ見るく左仲次よ隔らま。国を退るても薄命つれ。ぬく推安となる果ても。兄なく姉えよ聽て合ぬよ僥倖よ。憂めむくと詰んと楽しく指折るぞく暮せるよ。一位なるれお両位ぞ。非命の死と遂まひしとい。

いろるる五世の報ひどや。こちらへとくも陽命のものもがめも
六三郎が大病ゆゑ。良薬を得んとて。姪女となりしこれ。因至が
子のこと。角觝とりうち一度對目なりしが。其後も絶て音絶
なく。又六三郎の三年祀。便さへなしよし。夜なく志のび
逢しまひよ引く。其後は便言絶もなれるとう。あめと傳りの
積りくて。病ひよ臥る未申。世なく猪り早り。秀吉孫をよび
よせ。所方よ知れ。六三郎さまと呼へる中の一子六之助と云る。もと前
さまのゆめふ初孫なりと。ゆめける義願のうちよりよし紀あけ。あ
うゆまざるい人の種六三郎よりの。今吉彌呼ちうち其侍の
祖母なるぞ。世よあくさはるとべ。祖母そこちと人毎ま議しるのも
なみとうちへ。さるみられしうち
んみと。りくべうを紀中くる逢人との

後よくあまべ。ものくの幼ぞ世とうくめと。抱きめく解念み
き位顔と。吉孫をつくくんくく居うし。母さまの幼そうよ猪り
まひる。祖母さまみや。愛襲さまよ。今祖母さまよ。又うくの内へ
連てよ。あのうみ形名のうく。男子の形よつくうう。大小を腰よ
さ。母さまと常よくても。咬ぬ牙よるうしを紀今といつく
母どるのと回答るるぐさ口さめも。何あまくく咬ひつ。ぐ点ける
だうるるり。赤ちゃいハ嚮うるも幼なる女の童。両位う間へさ
置く。いくく欲ける形勢をつくうりひ間ひけまべうハ左こと
くよ。ちひ。六三郎とうくんが中の出生の男子。六之助と云るゆめ
なまどゆくうまめのるひまそ。ぐ子なるうとく投雪ゆさでう。
撫丁の情みく。女の童よ形を作り。朝夕みも所方よ紀育る

より紙細かく書付及ばせ。紙こゝハ主人の種の一子なるをとゝめく知り。且ゝとび且悲しゝ。嘸く腰よなりなる。綿の袋をそり出し。中より高俳家の宝硯を教しく。加之久ゝ前へ直しなれ。僕部左仲次ぶ太兵とゝ云る者の方より取返し始末ゝ。妻風のゝぶゝあるゝ。操を破りし紙断魄て自書るを。耳聾ゝるゝ。成人をんゝあと逢ゝるゝ紙巣をゝ。ゝ阿女の小雪。神ゝぬ男のゝぶ子ゝゝ。誤て締殺し。硯をゝし迄残ゝるゝ。用と倶ゝ詰り。いひく詮なし。阿女ぶ微運をゝさまれ。這況ゝぶ方ゝありても公ゝゝ。定めく六三郎ゝゝ。疑ね来ゝゝあるゝん。妻子ぶ男ゝ主君の家を再奥の。ゝを忠義をゝ主さんと。ゝつゝの品なれ。

主君へ報恩ゝ。しさまゝゝ憑ゝゝゝとゝ得の勇気も恩愛の間ゝゝをあゝへせゝ。何ゝゝれ大切なるゝ硯切を麁相なれゝゝゝと。歎くしゝぶ手ゝゝゝゝゝゝ。昔ゝ復る芽出多ゝ花は節。ゝゝ見ゝゝゝ日くゝゝ通路も公任せ。義顧さまゝも悲ひゝ公頭くも。幽ゝハゝゝゝゝ。人のゝんも羨ゝくバ。一ゝゝゝゝの家を主別ゝ。六三ゝゝ影ゝゝゝ。當下ゝ。當國雑波ゝて。腕の義三郎とゝゝゝゝゝゝゝゝ。住所のゝゝゝゝゝゝ。隔つ。公を仮ゝて業気ゝく。義顧を伴ひゝゝる。しい脱を足遣りて。ゝゝゝの運ゝゝ。公中しく。名残引気ゝゝゝゝゝゝゝ。六三郎ぶ信義をゝの紙ゝゝ。ゝゝゝゝゝ。長庵ハ隠房を主出る。ゝるゝゝゝゝ吉紙

小園紀念
かしくげ
まへおく留所
いく歩
吉弥
春之助

おうぢ
うーく

同じくさとせ。教えぬまとべ。やがてくもその公をさとう。奥深く行ぬ。長庵ハ[illegible]ぶ備ハ居う。[illegible]し鄙みも言沢ぞく太兵の内。汝ハ深く懸相るせべ。彼が方へ根引さま。妻とるべ何一ッ足しうとど。栄耀栄花ハ公のまうるべ二ッ汝ぞうの栄利図るハ[illegible]ぶまでの福るう。縱令撥下清兵衛ハ青引ざるとも。汝さく背引ハ正しく青雲を妨げるあるれう。當下そハ兄の戒光をりく。當国の守く弱く。首尾整へえとべし。汝ハ定めくえうべきを新もるれ。六三郎へ操立るさ、後ろのあるべけまど。彼ハ浪くの男のうべもるれ漂泊の行方さく志まざるも。縱令ハうの所ハあうとく。高伴家の神硯を見ぬんうめハ。実ハ国を追まとうとうありけまど。

その硯彼が一生ハ絶おくよ至るまで。ゆくと印南の家ハ返るとあるまじく。さまべ口腹を養ハとるうべ。貪しく暮さうう。うが異見ハ従ひ。太兵のぬしの妻とるう。一生を安楽ハ暮さんよまくとあるまじく。迷ひをとり後悔るうべうどと。只顧う荐めけまべ。ハ長庵が胸元を引さく。ぬん牙腹元ハ異るん。正しく血筋ハあうるべう。教馴いうどしと。内慾ハのこ目くるめれ。零落ハる六三さまをえまを財宝をしうぬとく。失行ハ繕びしく縁るもあまべ。太兵のぬしの方へもれ。女の道のうべ行べまや。義頼振の物ハうるハ。源ハ亟まも。大病るハまけまど。ぬん牙の茱豚用るべうう。直地ハとるうべ死ぬハとく。あるべさるとハりハざれど。その慾深きまくハ。若くハ病ひう

障りなる業も用ひ〳〵なるぞや。と。他人もあるなるべ。恨みなる
仕方もあるなんが。同じ血筋の兄と兄。をあるなる事なる延への
帰糸の幸あり。些なれの見継へるなへが。なよあり。大平太兵の主
への媒妁へ。ぞまりてあるなるとう。言葉を尽〳〵のふとも。さく
耳へりとざるるなると。猶劣るよりひ放せば。長庵へ手を又き。術
を仕賛さく。孤さんとうち露語なる。光景あるく。親のむまきたび
との譬のなぐ。なれへ汝を憐みありへべなそ。言を尽〳〵理解
なるとなく〳〵も。膳の膝をあり静め。兵別〳〵えなべ〳〵。都て別人の
議言毫の未だなるのなるよりも。なるあり気よりひ觸なるへ昔
も今も異なるなる。源之丞なるなり。何を恨を何を憎へ。
仇なると公のあなべそぞなまくて。公秋惑りなべなる。源之丞なる

うへ。端打境の同胞なる。一生のなるひめなるし。なれがうへ
あるなるをとなるを尽〳〵ひ雑きも。包なるく自地なり
吐も血筋の破なるさなるなるも恭せよと。傳の洞をなるべし。
なるなるなべさえせけまべ。なしも今更同胞の。血筋の縁よ
ひなるまべ。左もあるべきと公よ惑ひ。なるへを深く憐へて
の憎て口あるなるべ。なるどく公よ面へきぞ。ひなるなるま
なまど。なるなるふ説も安堵のなる。なるへて人ふ洩きまと。彼
紙をなるひきひへなるへ。なるがき夫の帰糸なるべき時節も至
来。なん外のあるも僥倖なる。大平太兵のぬのなるなる
なるなるなる。なるこびてあるまう。長庵へひべなるなる顔身
なるく。しが傳へ摺なるく。何まま帰糸とあれべなるぶ

ゐも猶ゐり。太兵の方の商義を止むべきゐを。高津家の神石めよ入べゝさゐをうちハ六三ゝが帰糸堂東ゐる。ゐを去べしめん斗りの偽くなゝんと疑ひけをべ左よのゝど。ゐる津家の室硯ゆゑあつて戻ゝーゐり。長庵琴き。そハ絨みやと須更考へ。ゆやくと笑ひ生ゝし。根深くゐを方便とゆ。さバくゐの術よ学ぶべきや。実ゆあるゐゝば下目ゐ人せ安くゝしめゝと。再三責けをべゝし詮をべゐく。仮初ゐゐゝぬ大切の品。夫トへ手傳ーゐをまぞハ。他見ハゆゐさゝをどゆ。精疑を晴さまてゐよ。ゐをまつゝをゐりと。居方よ匿ーをゐる。綿の袋の中ゐり。室硯を生ーゐををべ。長庵手よゐり上。ゝーいゝゐ。探ゝ探脳打絲ゆ。高津家の室とハゝ

なゝゝ世よ類ひ希ゐる一品ゐをを。這品を手よ入りゐべ。六三郎ゝ帰糸ゆ慳ひ。ゐをよゆ死くゆゐゐびいゝをゐゐゆあく。汝ゆさゝゐゐうをーゐゐん。太兵のゆーくゐゝゐゐを砕死。黄金ゆいとハゝど。口説ゐゆ。実ゐゝゐるゆゐゝゐる。畢竟ゆゐゐるゆのゆをーバーをゐれよ頃を費ゆをゐと。目ゐり高くゆゐゝゝ。庭前の赤石目當ゐうちくきべ。何ゐハゆくゆをゐゐゐゝゝ神硯ハ微塵とゐつて砕けくゐゐ。ゝゝゐゐ狂気のゆゐハをゆ。長庵よゐり追ゐ恨ゐの殺くゝのんゆゆ。せ死ゆる泪よいひゐゆゐる紙。長庵ゐゆあゝを笑ひ。六三郎ゝ帰糸ゐるをくをゐゐのゐ一品。ゐち砕けバをゆ六三郎よ山残ゐハゆるゆゝくゝ太兵のゆーくゝ隨ハべ。室の山へ登ゐゝゝ。深渕よ溺死よゐゐゐーゆゐん這

うゝい肯引ざるとも。又ゐゐめり諾言よさくるとも。ゐれ見の威光をのく。受生〜。太兵のぬ〜の妻とる。栄利を図らん上哭ようしゝ。長庵が腰よ帯ゐ経刀をぬ紀放ち。七彦が肩先へ切つゝべ。兄へ双むゐ大罪人。ゑゝのやく〜と大多紀擴げ。捉くんとるのゝを偽りて。外面へ走るを。逃さじとおびをいごせ〜しが頻智。かゐハさ女子のひるけまど。夫トの仇と名ひ迫ぐる一念よ。切りけゝる数ヶ所の疵。長庵ゐ目も眩ゝ。息も絶気よ瞳と塵ゝ。糸めりてゑのの刀。引ぬく間もるゝ人足よ慌てあゝ。辺方の薦。長庵が死骸よふんとうち覆ゝ。這家のあゝ〜清兵衛い。妻阿梶よ煎湯りとせ。しへまゐも蔭もえ。いくべき身ゐもあゝざるよ。忽体るれいろ〜ゝと。名利の行の怕〜

〜ゝの中ゐゐもおりく〜ども。ゝよゝゐぬ顔付しゝ。ゐるより然とうち〜ゝゝ。ゝゝ〜せゝ。お梶い入るより線ゐるゐろよ。面を殺。ゝゐ〜しゐろゝ夫の〜ひ付ゐゐ。忌嫌ゝとい走りるゐゝ。手紙ゐゝ品をゝゝ。進むるゐ。ゐ〜ゐのゝ手紙ゐゝゐゐもゐゐゐ。何ゐゐもゐゐ痛ゐゐ。逼ゐ直ゐゐゝ。殺ゐ醒もあるものを。ゐよ障ゐゐゐもゐゐば走ゐ〜の縁ゐゝゐゐゝゐゐゝ。恩を仇ゐる始末ゐど。羞めるを清兵衛い。お梶を制し。便ゐも落ゐゐゐゐゐ。ゐ〜が隔ゐゐ。憐むゐ紙ゐゐゐゐ。慕ゝ甘辛ゐゐ。ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。第面よ愛を含ゐ。色濃よ向く。日頃よ勝る肝明ゐゝゐゐゐゐ。自然よ顕を肉祝疲痩長き病ひよ附ゐゐゐゐゐ。煎薬も嫌ゐ。

加志久
あまつて
ちゅうちゅん
長竜と
教ゑ
うーく
ちゅう竜

心の侵よる。さらへざるこそ看病する子等はしこうがそろの逐ひ
まや。常よ異なる顔付といひ。息さるさまのつゝ気よ。動気衣を
うどうとべうう。薬をさらへで向傷るのどよ。咽を潤し紙つけよ。異
見かまれいひ言みく。心も障りるんが。一ト通り少べきぞ。情を結
賈拒女の身のうへみ。傍単中も不破と。ぶひよ憂もかうあひ。
助とるうなゝ是ようう。力とるうべきよ。面くの身よあうべきうぐ
みもうれやうよ。目を費一耳を放吹牛一えいぐく。頃日ひしが翠簾
みく。何愛の美男子みや。深夜よおうびひそふ怒び逢への頭り
るるよ。口く青る嫉妬ぐうめへざまぐ。そくよそく。頬へまぐり
哀憧るへうくぐ。都てつうめの客の数十人めまば七人い花実
も義くおとふまこ心よ障るエめまどつうれもひもせぐつとめぐ

めへる常の客。まさ哀もまき香もぐうへ。その癖情深れるど科める
やうよ拔ようるをこれるぐうそぐうく。と思くうくても片時ろ一ッ
金衣ハさそおれく。顔るエさへうぐくと忌嫌へ客へ二位みく。
そうめて逢ひしその夜ようう逐ひ幼もう得ふも。傍単の前をね。
静るうざる心をも。押付顔よ持るて臥房へ入りてもおりへこと。
万が一ッもいひうねる拒。暴へ客へ十人のうち思一人あるうるう。あや
みくうるさよおりひても。向方よさまでおりへぬめう。ぶひよおりひ思へ
是て。赤心をめて合る紀をううひを夜毎の口舌。彼るれ中の悪縁
も。うれ拒女の身のうへみ。うのをるへうとまうぬへ。今ちまう
るエうもみうぐ。さびうりのるう矢へつまど。ひうれつうめの中
の苦をを悲をを。身よ抱のも征人へ信めうるいへみあうざれど。

ゐひ生ぜず三光の星霜。おん身の征人の大病みく。さぐの苦辛。ひろ
旅店よ宵いる愁気。賤しくぬ人くの。如何ある宿世の因縁と。究
便るれおりひよ。袂を冥りまつも術のめりるんと。余仏るぐらもせと
ちとびおりへうち。治しくるれ大病の。良薬を得るとある黄金よ身を
贖へよ。世ふも稀る天晴負女と。感涙堰止ぐく。委細を論
せどりが方ふ。乞生く。おん身を二百両の芙含ふて。換代なく。
這神崎へ誘ひても。夛くの拉女を授へ身で。負女の徳ふもめりるん
がれだろう妻るりのまで。ひけ完璧を深ふるとへ。言説ぞとも
發覚てもめろべく。恐びめへその人へ。めりくへ六三ゝ哥ゝみもめれど。
まろふれくが前を気の毒よたぐりおりひ。翠簾るぞふく添び
逢ひ身ゝくのまでも。話なるさん公の中も。静るふねべいへとも残り

ゝちる曉を。科る死鳥の告るさへ。恨むも哀くのまであへ聖
の夜をまち侘びその人へもるく便りも叨。青耗へ尚めゝべてて。
ゐひゐ一の日よ重ゝ。竟へ病ひの種とる。六三ゝ哥ゝみもめるる
らべ。るどそつぐゝようちめけて。晴ゆへ逢合ね。這遍賤しく活質
るせど。征人と憑むその人の中を裂悶ゝそるとゆるゆ慈悲邪
見よゐまでへ。泥ぬぞや。茱を嫌ひ食を叨。若ものゝもるるゝだ。
叨よ残る禿の吉弥。養育へのもくさぐ。さぞる便りのみ些めゝん
とへゐへどや。生存命てさへあるるゝべ。征人の故系惬へ叶節ゝ。
ゝゝへ年季の中るりとも。券書も反方とる。見と見ゝそるるぐ存
念。免まれ角まを健よ。身を持るゝとまゝ永る春の笑ひ顔。芽出度
表る祝きくるゝへ。這上の僥倖るゝと。信ゆふ教到るせべ。偽る洞を

足せまゝとしい袖は泪をうの中。ふんぐの繰返る言。ふんが牙は
ふんあるうのうのけまべ。中て詮るれ上るぐ。この家へ牙を沽
て。三とせの春をうせども。ふんまぐ一日も卧るうるく。偶こ痛出
の床は嬰まべとく。厚紙の紙詞は飾り。内のあ息を報へと忘れ
るといへざるうの教言。中ける日毎のうでさよ。そも苦思う
沈むるう。息みもかけざる撫丁ふ。つあるうそ苦思のあーうと。
日頃は仰気なれしが詞。出梶も忘れそ果てたう。清兵衛
へ涙をうぐ。ぞ中し鞍脇すーうれ果あやと。問るしへあぐう
笑ひ。頼悟の水上は住すくるうくは仰気なれ問ど。憂たうう
日輪へ照をすぐく。言説さうも知まうるは上じも。角零歳
うる牙のうくあへ。道もるく系理もるう。紙安く皆をたそ。勅乃

牙の保養ろれ「ろのあと詞を巧みくそ言述るとも。鞍脇さそう。
肯引ぐく。気隨気侵をうのけるのべ。抱への女子の残りるく。
鞍脇を好き度毎は公く肯引べ。這活賈のるすぐく。鞍脇へ
さそる行の罪のるのとれも。綾や綿を脱捨させ。綿布の衣
ふ牙を經せ。水仕業をさそるが定法。鞍脇のるへたやおりひ
ぐまるべし。縦令この牙は降かる哭ひがあはべとく一うん
うとるうしるも仮初の縁みもるく。哭雑を避んとく。ふうき
僥倖とその意は任せ情無閑なうど。鞍脇を願へその原
へ。外面は足ゆれあはるる萬「や「萬へ伊丹の極印めれば。
容易は別人みへ足せまぐく。茶わ服も通うぬ咽は。酒とう
へめのるのいし。名酒のあさそ中は。のうめう。若松

の〇くもまで。係逐んと云ひし中もるる仇る。國をさけ山
神崎へ流るの水上のおのれが壺へ引入て。
栄の利を図らんとの犬るるとべ。ちりハぬ方へ鳴臺の。三て九度を
暮ごと。学び理学び狩より引そんと。ゆゑぜひるる。後へひい
ゆ。その利目あいるる後気の男山も死るさまよ酔
がとく。目の牙を持て。蠱の首雪ちるる。倶よ俗んと云
のおく。象の牙のるるけ。雑波津よ咲花の白。梅墨の香を
ちて。ひとまづこの地を他田の甲。人の気も虎の。おれ　三国山
ちひの寿。かるるを人の口の端よかちぬのゞ。酒呑牙の嗜を
や。酒を熱を排し徳あるとべ。好める酒も一ハい保飛翠黛へ
るるどあれ。おりくるまよ気を晴せよと。掛祝のり生ゞ。

黄金十枚をそり出ゞ。紙こ包を。酒料のあの黄金ぞと。
が前へ投出ゞ。残る方るれ情の教訓。お捉い仔細を情得ぞん
ど。けゞ仕掛を着せ脅る。今死る牙よ不用とハ。おりくど
厚き情の金。ちしハそくちゞいぞれ。ひくの世よくハ報ふべき。
謝ちぐき殊も関よ隔。公の中のいとまをひ。ひハぬいひよ
ゞ増る。住ゞ外面へ立出るを。清兵衛ハるるぶるが。ゑくと
呼戻ゞ。保房へ走りあれ。寮る吾弥を抱き上て立出る。ちゃと
悪き酒を飲ゞそれ。牙の科出る。世分別もできるるの。そる
当下ハ合をサ。ゑ重ゞゞハ寮頭よめんゞのハを因当る牙を
揚のけ。るるのゝあるみも世よ。表よ忍び彼知よ匿を。逃ち
ふハ逃ゞが。ゑ兎のあ。ちハいハ逃ゞ吉ハちゞ。佐そのちく

吉弥
おかぢ
せいぐん
らーく

福清
かしこ
吳見ろ
さとろ
大當リ
くまぶに画
さいくが
さく
圓まるだま
あさき後編
煙亥作
北岩画
長庵
六三郎

秋と含まれたまべる程恩愛の輪田の紲さり云きど。こゝろよ
積る罪科の。一男は死出の山路へと。外へ出たまべ真夜中
月。彩由朗は両図。人やあるまと思ふ何へその人い。やよ六三
さまあり。るつ〳〵りと取縋て。死ぬべき身の何より先へ
言述んと。ものも待ぞ六三郎。しが手を携へて。辨る。
伊細いきつまべいひ続はせんるれと。人めはかりざるうちよ
いひそけべきも妻ゝけまべ。此方へ来てと。いぶ紙を元而の
定めるく。六三郎は後き。ほしいとどく落てけて。清兵衛
い涙ゝこゝるといぶる妻。征人の傍へさりて。仔細を問のよ
清兵衛い涙を掛ひ。ん身者ゝ。ものもぞや。ぶ抱へのし。亡命る
さもるるぶ。ゝ。ぶりぶ悲れぞや。素ゝ作ゝ病ひ

るぶゝ。非命の死をさせまじくとのよゝくて教ごと。
死んとはりふその根つと。外へ出く蔦引のけ。長麿り死骸
をえんもまべ。駿く阿梶。そハるふもるとゝるれまづめ。ふゝと
死骸を蔦ゝく覆ひ。やよ青高一人や問。夫ものよゝさ
さの。ゝるもるの死隘阻つし。その家を鞍智る。後雑とりけ
おゝくゝと。女子のあとるの死ゝふも。苦内の中の計。苦労を車
便るの死りの。後雑を怕ゝとゝ。鞍智させて道るゝ。一日るる
とも生延させゝさ。そゝめて志りるお梶の熱傷。ゝるも。病ひよ
死るるとおゝべ。六之助る頼ひといひるるも。実るりしと。倶よ泪よ
かゝる。遍へ船越十兵衛へ。深房ゝ立出ゝるるくもん身
遊の。ゝめくゝ死教言。武士も及べぬ心底をえゝるゝ。ゝ〳〵ふ

かつてぬ主従ぞと。免しの詞よ清兵衛に。喜びいさんだりも
るく。忽ち恰一トもつ。これる梶女と依通のこと。引郡是。既よ死
刑よ。もとるつるべき紙。何とるよ暇を玉わり。人うまれ業ひろのこも。
古主へ恐まと。道るるぬ。この度世の其中も。古主とのし。魂生
の恩人。神仏をさ。あれそ。夫婦常よ怠りるる。礼作るも
も恩を忘まぬ両位の信。神も憐み玉ひて。動命に救免
い。育毫の像木の幸るれと。三作九作重兵衛に。彼れをん
ま。ひそいくるれ。めがとるつけ。汝へ言べき仔細あり。と申
ろ清兵衛さそろ。女敵討の形ひて。国を退り玉ひと。仰
を為ぬ。笑うい。めが牙のうるあや。申よ疎忽をいふすく。が雖
を救ん。云号といひつのり。夫有ふそ国をれど。左よあるぞ。

とと女敵討ふも申よ。討べきかしい鬼原の阿女。汝の家のかめ。
傾城のかしるり。廣き世界よ似る名ハめづらしめるぞ。女敵を
討べき癡漢ふもあるぞ。不存。称める仔細ハ高俳家よ伝来の
硯ふそ。當国よ住居るを。骨董鋪太兵と云る者。所持るるる。
彼れ漢部左仲次るれば。捉ぐきとるうちち。ふや何地へ
亡命るるつるり。清兵衛ふ。ふるぶうて。申ふ玉ふ言伝家の神祝
ハ。が兄長庵が為ようち碎ま。夫有よそ六三郎へひ訳
るるとふ逼りて。正れ兄長庵を手よ掛ると推量まり。便
るれが。ふしぶ。その硯を真赤る偽物。又六三郎り音信ぬ道
理。三年以前。長町の旅店よく。保児岡平がその為よ病
るふけ。六ふを。元数。が牙の代金二百両と。印南重代の

仁王三郎の刀りろ。奪ひ立退く。其名容も取りて。大前の角能白龍次郎八といふるゝを吟出せり。されば六之助が為正〳〵兄の敵なれば。母方の助をする育。敵を討せくまよと。近〳〵兄を手よりかけられが。其罪ありあるべけれど。偽物の仇のその上にも。其六告ぺ八之助十五宗ゆえ。死なべき筋も忍へよう。左いと所詮いくべき病ひるゝとぐと。一端あんどをさせよとの。重兵衛が指揮を領掌るゝぺちゝ〳〵しが跡を追ひ行ぬ。

加之久全傳香籠叶　巻之五　終